

御挨拶

京都市立芸術大学は、1880年の建学以来、わが国の芸術文化を牽引する数々の優れたアーティストやデザイナー、プロデューサー、教育者らを輩出してきました。そしてその伝統を連続と継いで、現在も、国際的な舞台上で活躍する幾多の才能を世に送り出しつづけています。

本学で創造活動に励む学生達もまた、芸術文化の蓄積がことのほか厚い京都という土地で、その究められた精神と技法に深く学びながら、そうした燦然たる伝統に新たなページを付け加えるのだという強い意欲と自負心を持って、日夜制作に取り組んでいます。

このたび御紹介する迎英里子は、今後の活躍が大いに期待される気鋭の新進作家です。これからの国内外のアートシーンの一翼を担うであろう彼女の作品から、時代の空気を感じ取っていただければ幸いです。

京都市立芸術大学学長
鷺田清一

ホテルグランヴィア大阪で開催されるアートフェア、ART OSAKA の特別企画として、「京芸 transmit program 2017」 出展作家の迎英里子による個展「アプローチ7」をART OSAKA 2017 会場内で開催します。

ART OSAKA ではこれまで京都市立芸術大学とのコラボレーションにより、将来に大いに期待できる若手作家たちをフェア企画展によって紹介してきました。今年度は、自作の装置とパフォーマンスによってさまざまな事象に接近を試みる美術作家、迎英里子による個展「アプローチ7」を6019号室にて開催いたします。新進気鋭の作家のあふれるパワーをご覧ください。

会場：ホテルグランヴィア大阪 26階 6019号室
〒530-0001 大阪市北区梅田3-1-1 (JR大阪駅直結)



アクセス：JR 大阪駅 中央改札口を出て右手すぐ

ART OSAKA <http://www.artosaka.jp>

企画：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
主催：ART OSAKA 実行委員会
協力：京都市立芸術大学
京都市立芸術大学キャリアデザインセンター
後援：京芸友の会

問合せ先：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
075-253-1509
galler@kcuu.ac.jp
<http://galler.kcuu.ac.jp>

迎英里子

Eriko Mukai

- 1990 兵庫県生まれ
- 2013 京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻 卒業
- 2015 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻 修了

主な展覧会

- 2017 京芸 transmit program 2017 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA / 京都)
- 2016 対馬アートファンタジア (対馬市内)
個展「アプローチ2 [石油]」(Gallery PARC | グランマーブルギャラリー・パルク / 京都)
「新しいループ・ゴールドバーグ・マシーン」(KAYOKOYUKI | 駒込倉庫 / 東京)
- 2015 アキバタマビ 21 特別展「捨象考」(アキバタマビ 21 | 3331 Arts Chiyoda / 東京)
個展「アプローチ1 (original) アプローチ1 (archive)」(Alainstheonlyone / 東京)



アプローチ5.0 (2016)



アプローチ2.0 (2016) Photo by Hyogo Mugyuda



食肉の流通経路 (2014)

京芸

transmit program 2017

ART OSAKA version

2017.7.8 sat. – 9 sun.

8 sat. 11:00–20:00

9 sun. 11:00–19:00

(入場はフェア終了の1時間前まで)

ホテルグランヴィア大阪

26階 6019号室

迎英里子

Eriko Mukai



入場無料

(ただし、ART OSAKA 2017 への入場料 1,500 円が別途必要)

迎英里子《アプローチ6.0》パフォーマンス (2017) 写真：松見拓也

Eriko Mukai, Approach 6.0, 2017. Performance. Photo by Takuya Matsumi

ART OSAKA 2017

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA



Career Design Center
Kyoto City University of Arts

ア
プ
ロ
ー
チ
7

Approach 7



Photos by Takuya Matsumi



国債の仕組みや石油の誕生、屠畜など様々な現象のメカニズムをモチーフにしたパフォーマンス作品を制作している。現象自体が持っているイメージや意味合いを解体し、現象そのものの捉え方を見直す場を作る。モチーフにした現象を、それが起こるメカニズムを軸に分解し、再構築して全く違う姿形に変化させる。メカニズムを再構築してできた新たなシステムは、木材や布、ビニール、日用品など様々な素材で制作した複数の装置を、作家が動かすことで作動する。観客は何が行われているか推測を重ね、その推測とモチーフのメカニズムとのイメージの落差から、イメージが取り払われた現象について思考する。

迎英里子

Photo by Takeru Koroda

彼女はこの「アプローチ7」と名付けられた新しい舞台で、自らが理解しようと試みる何らかの現象を身近な素材に置き換えた装置を設置し、それを実際に動かしていくことだろう。これを書いている現段階では、私はまだ何をモチーフにするかを知らないし、おそらく事前には聞かないと思う。生まれたての装置の中で彼女が初めて実践を行うのを目の当たりにするとき、細部に捉われた状態、つま

り細かなパーツがそれぞれ具体的に何を表しているのかを近視眼的に探りながら見ることで、見えなくなってしまうことがあると考えるからである。

モチーフとなるものを理解するためにさまざまな文献を探ったのち、数々のスケッチ、設計図の制作を経て装置は生まれる。彼女の動作は、資料のページをめくる、ノートに文字を書くという段階か

ら、木工作业や組み立てに至るまでにだんだん大きくなっていく。そして出来上がった装置の中に入るとき、自身の身体をもその一部とする。しかし、装置完成に至るまでの一連の行為を経てその中でパフォーマンスを行うことは、彼女が対象となる現象を完全に理解できたことを意味するのではない。彼女はそうすることで、ここに至るまでの自らの思考方法を開示しているだけである。組み上げら

れた物質を通して、彼女は実体を持たないイメージをその中に放出する。

この部屋を訪れる鑑賞者は、装置の中でパフォーマンスを行う作家の姿を発見することのできる「動」の状態と、とある瞬間で止まった装置とパフォーマンスの記録映像の上映からなる「静」の状態のいずれかに立ち会うことになる。おそらく後者のパターンが圧倒的

に多いはずだ。作家不在、いわば抜け殻となった装置と、その痕跡を迎えることはできてもどこまでも平面的なものでしかない映像とを手掛かりに考えを巡らせるとき、その細部がそれぞれ何を表しているのかを知ることで得られるものよりも、作家不在であったとしても装置の中にとどまり続ける不可視なもの、その場にある複数の物質の集合体である装置との接点とに着目し

て得られるものの方がはるかに大きい。彼女が表すもの・ことではなく、彼女が表現しようとするもの・ことを作品の中に感じ取っていただければ幸いである。

藤田瑞穂
(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員)